

子どもたちの命を守る 防災教育の必要性



兵庫県立大学環境人間学部・
大学院環境人間学研究科准教授

き むら れ お
木村 玲 欧

1975年生まれ。京都大学大学院修了。博士（情報学）（京都大学）。名古屋大学大学院環境学研究科助手・助教等を経て現職。専門は防災心理学、防災教育学、社会調査法。主な委員は、内閣府・防災教育チャレンジプラン実行委員会委員、岡山県教育庁・実践的防災教育総合支援事業推進委員会委員、岡山県・地域防災に係る専門家検討会委員など。6月には『日本歴史災害事典』（吉川弘文館）を編纂者として出版した。共著に『超巨大地震がやってきた スマトラ沖地震津波に学べ』（時事通信社）、『三河地震60年目の真実』（中日新聞社）など。

一 南海トラフ巨大地震における岡山県の立場

八月二十九日、国は「南海トラフ巨大地震」の被害想定を公表しました。最悪ケースでは三十二万三千人が死亡するこの地震において、岡山県でも沿岸部の市を中心に震度六強、死者千二百人、三〇四メートルの津波が到来すると想定されました。

しかしご安心ください。南海トラフ巨大地震で、岡山に津波の第一波が到来するのは、地震発生から二時間四十五分後ごろと想定されています。和歌山県串本のように四分で十メートルの津波が到来する「天災」とは違います。状況の把握と避難に十分な時間が残されているのです。

これは裏を返せば、岡山県で南海トラフ巨大地震によって逃げ遅れたり、様子見に沿岸部にいたりして流された児童・生徒が発生したとするならば、それは「教育の責任」だということなのです。また、地域で逃げ遅れた高齢者や要援護者がいた場合には、「地域の責任」だという誇りを免れないでしょう。この意味において、岡山では少なくとも津波によって死者を決して出すわけにはいかな

い。もし死者が出たならばそれは天災ではなく「人災」になるのです。

二 東日本大震災での悲劇

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災では、それまでの学校の防災教育・防災訓練のあり方に大きな見直しを迫る悲しい出来事がありました。私たちの記憶にも新しい宮城県石巻市大川小学校での悲劇です。あの日、校庭に避難していた児童百八名中七十四名が死亡または行方不明、教職員十一名のうち十名が死亡または行方不明となり、スクールバスの運転手も死亡しました。

大川小学校では、地震後は机の下に隠れ、地震から十四分後の十五時頃には校庭に集合して教員が点呼をとりました。しかしこの後、教員の間で「このまま校庭で待機する」か「津波の到来を考えて逃げる」か「逃げるならばどこに避難すれば良いか」について、あいまいな状況の中で判断して結論を出すことができませんでした。宮城県が二〇〇四年（平成十六年）三月に策定した第三次地震被害想定調査に基づく津波浸水域予測図では、大川小学校には津波浸水

がなく避難所として指定されていたことや、大川小学校の防災危機管理マニュアルに学校以外の避難場所の取り決めがなかったことも結論が出なかった一因です。

結局、地震から四十分以上が経過して、学校の約二百メートル西側にある、周囲の堤防より小高くなっていた新北上大橋のたもと（三角地帯）を目指して移動し始めることになりました。そして移動直後、津波は堤防を乗り越え児童の列を前方から飲み込んだのです。列の後方にいた教師一人と児童の一部は向きを変えて裏山を駆け上がるなどして一命をとりとめたものの、最終的に児童の約七割が死亡する事態となったのです。

三 台本に沿った「おはしも」避難訓練の限界

この悲劇は、「おはしも」（または「おかしも」）だけの避難訓練には限界があることを示しています。「おはしも」とは避難する際の「押さない」「走らない（駆けない）」「しゃべらない」「戻らない」の頭文字をとった標語で、現在、多くの学校で採用されている防災訓練です。しかし、

この標語に従って与えられた台本通りに機械的に避難することを繰り返しているだけでは、児童・生徒、そして教職員についても、想定外の事態、想像を超えた事態に直面した時、「何を考えればよいのか」「何をすればよいのか」という災害対応行動を考え実行する力をつけることはできないのです。「おはしも」はあくまでも「避難する時のお作法」であって、これだけでは「避難行動」を理解し生きる力をつけることはできないのです（図1）。



図1 「おかしも(おはしも)」はあくまでも避難する時の「お作法」であって、これだけでは避難行動を理解し生きる力をつけることはできない

では私たちはどうすればよいのでしょうか。その解は「防災訓練を含めた防災教育の原点に立ち戻り」「優秀な先例を知る」ことだと思えます。そもそも防災教育の目的とは、個人の「生きる力」を伸ばすことです。具体的には、どのような状況でも、その場で、自分にできるベストな対応方法を考え実行する力を持たせることなのです。そのためには体力、知力、決断力、持続力などあらゆる力が必要になり、このような力を身につけることが防災訓練や防災教育プログラムでは必要とされているのです。

四 先行事例を知る「防災教育チャレンジプラン」

みなさんは「防災教育チャレンジプラン」というものをご存じでしょうか。ぜひ一度、この言葉で検索してホームページを見てください。内閣府などのサポートのもとに、防災教育の専門家有志によって二〇〇四年から行われている試みです。

「二十一世紀の災害に立ち向かうのは、今の子どもたちです。災害に見舞われたとき、自分自身を守りお

互いに助け合っていける力を今から育む防災教育が、この国の将来にとって不可欠なのです」という考え方のもとに、防災教育の新しい試み、アイディアによる活動を支援しています。支援は、資金面での支援だけではなく、防災教育に取り組む個人、団体の交流の場をつくり、知恵や情報の共有、取り組みの活性化に対しても行ってきました。学校や地域など百六十二団体をこれまで支援しています。

これらの団体の活動内容は、「防災教育チャレンジプラン」のホームページから見るができます。ホームページで紹介されている防災教育の内容は大きく三つのタイプがあります。一つめは、学校での総合の時間を活用した継続的な学習、二つめは、地域と共同した集中的な学習、三つめは、新しい防災教育の試みです。団体には、新しい防災教育のコンテンツを次々と作っていく作曲家のような団体と、様々な団体が作りだしたコンテンツを上手く組み合わせながら学校での教育活動・行事の中で取り入れていくいわば演奏家のような団体があり、さまざまです。学校の種類も、普通学校だけではなく

く特別支援学校用に作られた防災教育・訓練プログラムもあり、九年間の蓄積を知ることができます。

五 小中高等学校の防災教育・訓練プログラムの実際

防災教育・訓練は、学校の規模や地理的特徴、防災教育・訓練の実績などによってさまざまです。「防災訓練のバリエーションを知りたい」「学校行事として防災をテーマに何かしたい」「避難所体験をしたい」「防災グッズを使いたい」という希望については、防災教育チャレンジプランの「トップページ」から「防災教育の素材を探す」をクリックすると個別の内容を見ることができ、ぜひ参考にしてください。

ここでは防災教育・訓練プログラムにどのような種類があり、先行事例で行っている学校はそれぞれのプログラムをどのように関連づけているのか、「年間計画」や「単元構成」としての「体系的な防災訓練・教育プログラム」を組み立てているのかについて紹介します。

図2を見てください。小中高等学校で行われている防災教育・訓練プ

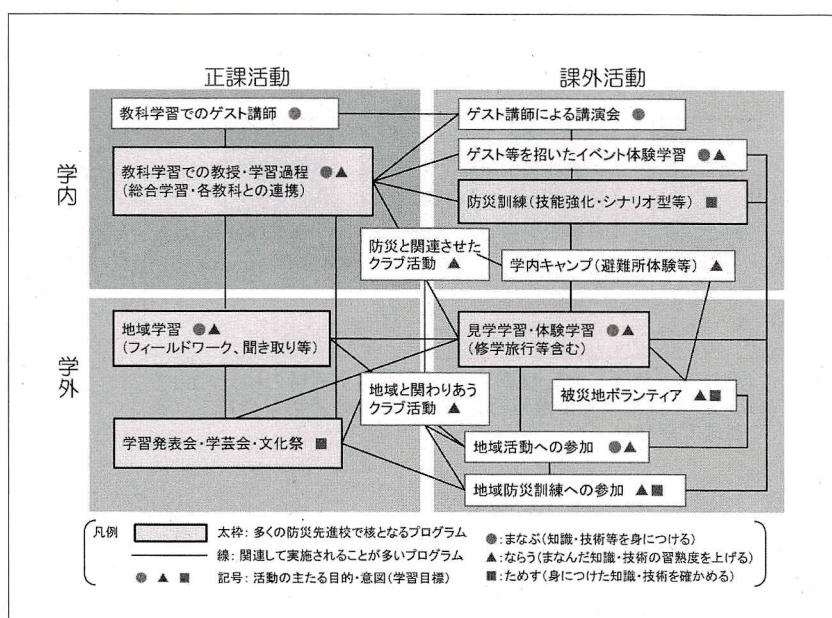


図2 小中高等学校の防災教育・訓練プログラム

は、それぞれ軸によって分けられた4象限のプログラムを上手に関連づけることが防災教育・訓練を推進していることがわかりました。「教科

学習での教授・学習過程」を基礎としながら「地域学習」「見学学習・体験学習」へと展開して、さらにその成果を「防災訓練」に転用する、逆に「防災訓練」を学習のきっかけとしながら、「学

習発表会・学芸会・文化祭」などを通してその成果を地域へ発信し、最終的には地域防災力の向上にまで寄与していくというモデルです。

ここでは二〇一〇年度に防災教育チャレンジプラン・防災教育優秀賞を受賞した「岩手県釜石市立釜石東中学校」の例を紹介したいと思います。この学校では「津波が来ても、避難して死者ゼロを目指す！」とい

う目的のもとに、①「自分の命を自分で守る」避難することの大切さ・避難してよかったね、②「助けられる人から助ける人へ」災害弱者への支援、③「防災文化の継承」保護者地域への発信という三つの目標を立て、五段階にわたった訓練・教育プログラムを実践しました。

まず第一弾では、隣接小学校と「小中合同避難訓練」（弱者への支援、地域・行政との連携）を実施し（防災訓練）、第二弾では、「宮古工業高校と連携」して津波の浸水模型を使った出前授業から津波について学び（教科学習）、第三弾では「安否札千枚大作戦」として、「避難しました」と家の戸口にかける安否札を作成して地域に配布し（地域と関わりあう活動）、第四弾では「防災ボランティアリスト」として全校生徒が十コースに分かれる体験学習を行い（地域学習、体験学習、クラブ活動）、第五弾では「目指せ！EAS Tレスキュー隊員一級」として「地域の一員として活動した生徒」に資格認定をしました（地域活動への参加）。

さて、ここまで紹介をして「釜石東中学校」という名前に聞き覚えの

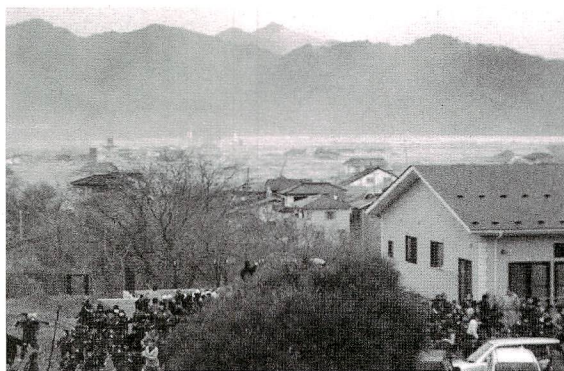


図3 2011年3月11日、避難先から見た津波
(釜石東中学校)

ある方もいらつしやると思います。
この釜石東中学校は、防災教育チャレンジプランの受賞式が終わった二週間後の二〇一一年三月十一日、東北地方太平洋沖地震に遭遇しました。地震当時校内にいた二百十二人の生徒が、地震の揺れが収まった直後に校庭に移動し、約一・五キロ離れた峠まで教員の指示を受けながらも自発的に避難をしました。またその行動が隣接する鶴住居小学校の児童の避難にもつながり、中学生や小学校の上級生が小さな子どもたちの手を引きながら迅速な避難を行ったのです。その結果、十数メートルの津波が押し寄せ、津波は四階建ての校舎

を丸飲みしたにもかかわらず、小中学生全員が無事でした。マスコミなどで「釜石の奇跡」と呼ばれている出来事です。防災訓練・教育プログラムが、まさに児童生徒と教職員の命を救ったのです(図3)。

六 新しい防災訓練のかたち ShakeOut(シェイクアウト)

最後に、新しい防災訓練として世界的に注目されるShakeOut(シェイクアウト)について触れたいと思います。このシェイクアウトですが、二〇一二年三月九日に東京都千代田区で学校・企業等の参加による国内初の日本版シェイクアウト訓練が実施され、約二万五千人が参加しました。テレビや新聞報道などでご覧になった人もいるかもしれません。インターネットで「シェイクアウト」と入れると、日本語版のホームページを見ることができます(図4)。

シェイクアウトとは、二〇〇八年、防災関係者らの発案でスタートした米国最大の防災訓練です。二〇一一年十月二十日に、米カリフォルニア州全域とオレゴン州、ネバダ州などで行われた『The Great California

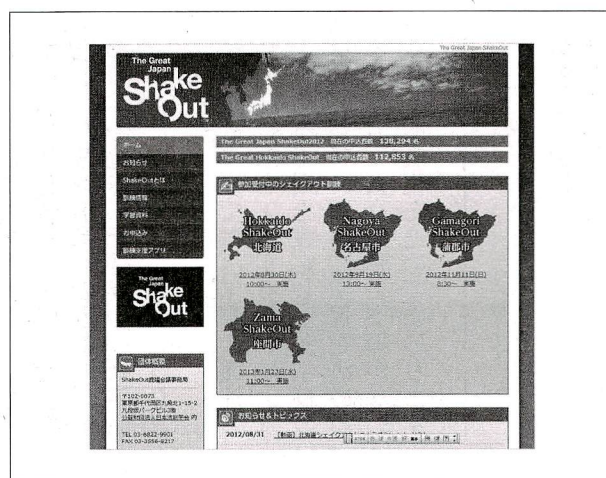


図4 日本版シェイクアウトのホームページ。対策・行動についてのわかりやすいパンフレット(学習資料)もダウンロードすることができる

ShakeOut』には過去最高となる計九百五十万人が参加しました。

シェイクアウト訓練の特徴は、様々な人たちが様々な場所です、最新の地震研究データによる災害シナリオに基づき、一斉に訓練を行う点にあります。『The Great California ShakeOut』はお店や学校、オフィスビル等で同時に訓練が行われました。このうち主な会場となったロサンゼルスのスーパーマーケットでは、揺れがあったという想定で店内にいる店員と客が一斉に身を屈めるという訓練が行われました。

シェイクアウト訓練の参加者は、

地震災害発生時にとても重要で、しかもシンプルな「安全行動の一・二・三」をとります。ケガをしないことが基本で、その後は状況に応じて安全を確保することを学ぶのです。米国の訓練ではこの行動は「Drop(姿勢を低く・)」「Cover(体頭を守って・)」「Hold on(揺れが収まるまでじっとして・)」と呼ばれ、小さな子供から大人まで誰でもできる基本的な安全行動として知られています。

この訓練では、子どもは学校で大人は会社や家で、組織や居場所が違っても一斉にみな同じ想定のもとで防災行動をとることになり、家族や地域全体の防災意識の向上につながる社会啓発運動にもつながります。

二〇一一年は千代田区でしたが、今年には日本でも多くの自治体でShakeOutが実施される予定です。その動向にも注目して、もしみなさんの地域でも行われることがあればぜひ学校での参加を検討してみてください。